

『私の戦争体験』

手記(平成 23 年)より

加藤 美子さん(太田在住)

私は 1936 年生まれです。私の家は八尾の南の端、南に大和川、北には八尾飛行場があり、戦争当時は軍事基地で兵隊さんがたくさんおられました。父は小麦の製粉所をしており、兵隊さんの食料を扱っておりましたので、毎日兵隊さんが小麦粉を取りにきておられました。昭和 18 年頃より戦争が激しくなり隣組で防空壕を造って、皆で訓練をしておりました。私は小さい胸の中で「大変な事になってきたな」と思いました。

昭和 18 年に小学校に入学。だんだん空襲が激しくなり学校に行くときも母の作ってくれた防空頭巾をかぶって行くことになりました。両親からは「学校から帰ってくる途中に敵機が来たら、畑か、よその家に入れてもらいや！」とよく言って聞かされました。戦争がさらに厳しくなった頃、兵隊さんが学校の校舎に入ってこられて、勉強をする場所もなくなり。大和川の橋の下で授業をした事もありました。兵隊さんの上の人はお寺や、村の大きな家で宿をとられ、軍刀を下げて馬に乗って歩いておられる姿は目に焼き付いております。

昭和 20 年に大阪空襲があり戦火で皆焼けだされて村に帰ってこられました。堺が空襲になったときの夜には、西の空に焼夷弾が次々と落とされ、防空壕に入っておられず、恐ろしさから南の工場まで行ったとき、西の空が花火の様に真っ赤に染まっていたことは今も心の中に強く残っております。

その頃は、戦争も一番激しい時で大和川の堤防上空より村をめがけて戦闘機が機銃掃射してきました。防空壕から出ると弾がたくさん落ちていたものです。軍医さんが宿を借りておられた友達のお宅では、奥様が赤ちゃんをお腹に入れたまま、飛行機の機銃掃射に撃たれて亡くなるという悲しいこともありました。家の壁にも弾の穴が残っていたそうです。村の真ん中にも爆弾が落とされました。私も小さいながら、今日、命があっても明日のことはまったく分かりませんでした。その頃になると基地から特攻隊といって戦闘機に乗って 17 から 18 歳の若い青年達が敵地に飛び立って行かれました。父の話によると製粉工場の横に小川が流れて田園風景が広がってお

りましたが、その小川で少年二人が魚を釣っていて、「おっちゃん、明日になれば特攻に行くんや。今日最後の釣りや」と言っていたそうです。それを聞いたときは胸が詰まって涙がこぼれました。多くの人達が特攻隊で命を落とされました。

昭和 20 年 8 月 15 日、天皇陛下のお言葉があり、終戦になりましたが、悲しいことよりも本心では子供心に、もうこれで敵機や B-29 がこないと思うと嬉しい気持ちになったものでした。その夜、酒屋のおじさんがやってきて父に「明日になればアメリカ兵がやってくるから皆、この村から逃げなあかん」と言ってこられました。父は、「うちはどこへも逃げるところがないからここに居る」といいました。飛行場では兵隊さんが残った飛行機などを燃やしている音が恐ろしく聞こえました。女、子どもは外に出ない事と言われて不安な夜を過ごしました。あくる日、赤い顔をしたアメリカの兵隊さんがやってきて村の中を歩いたり、家を覗きこんだりして大変恐ろしい思いをしました。私は家の中に隠れていましたが、その兵隊さんは良い人で、子供たちを一行に並べて、飴やチョコレート、チューイングガムをくれました。初めて見る物にびっくりしたものです。今の世の中から思うと想像もつきませんが食べ物が無かった時代ですから今も忘れることができません。当時のことを思うと今はあまりにも物に榮えて本来の心を見失っている様に思います。